

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者 樂 地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもつてしをほろぼし、ふ復
 死 以 死 滅

くかつのはじめとなり、われらをぢごく
 活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくい、せかいにおおいな
 腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。

【 聖世祖のトロパリ 第2調 】

しんのかんかりよくはおおいなるか な、み
 信 感 化 力 大 哉 三

たりのしょうしゃはほのおのいづみのなかにあ
 少 者 焔 泉 中 在

りて、あんそくのみづにおけるがごとくよ喜
 安 息 水 於 如 喜

ろこべり、よげんしゃダニイルもししを
 預 言 者 獅

ひつじのごとくぼくするものとしてあらわれ
 羊 如 牧 者 顯

た り 。 ハ ス ト ス か み よ 、 か れ ら の
 神 彼 等

き と う に よ っ て わ れ ら の た ま し い を す く い た 給
 祈 禱 因 我 等 靈 救 給

ま え 。

【 降誕祭前期のトロパリ 第4調 】

グィルムよ、おのれをそなえよ、イデムよ、しゅ
 己 備 え よ 衆

う の た め に ひ ら か れ よ 、 イ フ タ よ よ ろ こ
 爲 啓 慶

び い わ え 、 い の ち の き は ほ ら の う ち
 祝 生 命 樹 洞 中

に どう て い ぢ よ よ り は な さ き た れ ば な り 、
 童 貞 女 華

け だ し か れ の は ら は し ん せ い な る し ゅ く ぶ つ を し ゅ
 蓋 彼 腹 神 聖 植 物 生

う ず る し ん れ い の ら く え ん と あ ら わ れ
 神 靈 樂 園 顯

た り 、 わ れ ら こ れ よ り く ら い て い
 我 等 此 食 生

き 、 ア ダ ム の ご と く し め る こ と な か ら ん。
 如 死

ハスト スは さきにおちいりしすがたをお興
先 陥 像 興
こさんために うまれたまう。
爲 生 給

【 降誕祭前期のコンダク 第1調 】

こうえいはちちとこ と せいしんにきす、
光 榮 父 子 と 聖 神 歸
ヴィルムよ、たのしめ、エワタよおのれをそ備
樂 己 備
なえよ、けだしみよ、めひつじ
蓋 視 牝 羊
は おおいなるぼくしゃをたいないにいだき
大 牧 者 胎 内 懐
て、うまんためにいそぐ。ほうしんなるせせ
生 爲 急 捧 神 世
いそはかれをみてたのしみ、ぼくしゃ
祖 彼 見 樂 牧 者
とともにちをのまするどうぢよをうたう。
偕 乳 哺 童 女 歌

【 聖世祖のコンダク 第3調 】

いまもいつもよよに、アミン。
今 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン 。

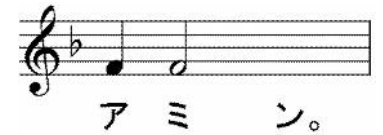


どうていぢよはこんにちえいきゅうのことばを
 童貞女今日永久言
 いいがたくほらのうちにうまんためにき来
 言難洞中生爲来
 たる。ぜんちよ、ききていわえ、おさ
 全地聞祝え、おさ
 なごとしてあらわれんとほつするえいきゅうの
 兒現欲永久
 かみをしよてんしおよびぼくしゃとともに
 神諸天使及牧者借
 さんえいせよ。
 讚榮

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 たわれらいやふとうなんちしよぼくこときおいなんちせい
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 さいだんこうえいまえたなんちとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
 しゅさいなんちみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんちじんじ
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 せいわれらしょうがいぜんこうもつなんちつとえたませいしょう
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
 しんぢよこせいなんちよろこびなしよせいじんきとうよ
 神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ざ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

司祭) 慎^{つし}みて聽くべし、衆^き人に平安^{しゅうじん へいあん}、

誦經) 爾^{なんぢ}の神^{しん}にも、

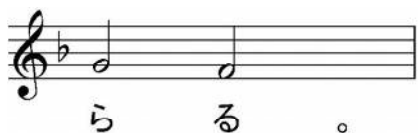
司祭) 睿智^{えいち}、

誦經) プロキメン、^{しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう}主我が先祖の神よ、爾は讚揚せられ、^{なんぢ な よよ さんびさんえい}爾の名は世に讚美讚榮せらる、

しゅ わ が せんぞ の か み よ 、 なんぢ は さ んよう せ
 主 我 先 祖 神 爾 讚 揚
 ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんえ い せ
 爾 名 世 世 讚 美 讚 榮
 ら る 。

誦經) 蓋^{けだしなんぢ およ われら おこな こと おい ぎ}爾は凡そ我等に行いし事に於て義なり、

しゅ わ が せんぞ の か み よ 、 なんぢ は さ んよう せ
 主 我 先 祖 神 爾 讚 揚
 ら れ 、 なんぢ の な は よ よ に さんびさんえ い せ
 爾 名 世 世 讚 美 讚 榮



ら る 。

誦經) ^{しゅわ せんぞ しみ なんぢ さんよう} 主我が先祖の神よ、爾は讚揚せられ、



なんぢのなはよよにさんびさんえいせらる。
爾名世世讚美讚榮

【 アポストロス 使徒經 328 端 エウレイ書 11 章 9~10、17~23、32~40 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ} 聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい しん きよやく ち あ おのれ ぞく ち お ごと} 兄弟よ、信によりてアヴラアムは許約の地に在りて、己に屬せざる地に於けるが如く、

^{およ すなわち どういつ きよやく おな つ もの とも まく お けだしかれ}
イサアク及びイアコフ、即同一の許約を同じく嗣ぐ者と偕に幕に居りたり、蓋彼は

^{もとい まち しみ いとな つく もの ま しん よ ころ}
基ある城、神の營み造る者を俟てり。信に由りてアヴラアムは試みられて、イサアク

^{ささ きよやく う もの そのどくせいし ささ すなわちなんぢ すえ}
を獻げたり、許約を受けし者にして、其獨生子を獻げたり、即爾の裔はイサアクに

^{よ とな い ところ もの けだしかれおも しみ またし ふくかつ}
由りて稱えられんと、言われし所の者なり。蓋彼意えり、神は亦死より復活せしむる

^{よく ゆえ これ よしょう う しん よ しょうらい こと さ}
を能すと。故に之を預象として受けたり。信に由りてイサアクは將來の事を指して、イ

^{およ しゆくふく しん よ し とき ふたりのこ}
アコフ及びイサフを祝福せり。信に由りてイアコフは死なんとする時、イオシフの二子を

^{しゆくふく かつそのつえ うえ はい しん よ おわ とき しょ}
祝福し、且其杖の上に拜せり。信に由りてイオシフは終らんとする時、イスライリの諸

^{し い こと おも かつおのれ がいこつ こと いめい しん よ うま のち}
子の出でん事を憶わしめ、且己の骸骨の事を遺命せり。信に由りてモイセイは生れし後、

^{さんげつかんそのふぼ かく けだしかれら こうるわ み おう めい おそ われ}
三月間其父母に匿されたり、蓋彼等は子の美しきを見て、王の命を畏れざりき。我

^{またなに い も およ}
復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムプソン、イエツファイ、ダヴィド、サムイル、及

^{た よげんしゃ こと の われ ときた かれら しん よ しょこく したが ぎ}
び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由りて諸國を従え、義

^{おこな きよやく う しし くち ふさ ひ いきおい け つるぎ は さ よわ}
を行い、許約を受け、獅の口を箱ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を避け、弱きよりして

^{つよ たたかい いさ いほう ぐん ついや おんな そのししゃ ふくかつ もの う}
強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復活せし者として受け

またあるもの　さら　よ　ふくかつ　え　ため　まぬか　ほつ　むご　ころ　た
 たり、亦　或　者　は　更　に　善　き　復　活　を　得　ん　爲　に、　免　る　る　を　欲　せ　ず　し　て、　酷　く　戮　さ　れ　た　り、　他　の
 もの　あざけり　むち　またなわめ　ひとや　こころみ　う　いし　う　のこぎり　ひ　ごう
 者　は　嘲　弄　と　鞭　扑　と、　又　縲　綯　と　囹　圜　と　の　試　を　受　け、　石　に　て　撃　た　れ、　鋸　に　て　解　か　れ、　拷
 もん　あ　やいば　ころ　めんよう　さんよう　かわ　き　るろう　きゅうぼう　かんなん　しん
 問　に　遇　わ　せ　ら　れ、　刃　に　て　殺　さ　れ、　綿　羊　と　山　羊　と　の　皮　を　衣　て　流　離　し、　窮　乏、　患　難、　辛
 く　しの　せかい　お　た　もの　こうや　さんれい　がんけつ　ちくつ　さまよ　これらみなしん
 苦　を　忍　び、　世　界　に　置　く　に　堪　え　ざ　る　者　は、　曠　野、　山　嶺、　巖　穴、　地　窟　に　徨　え　り、　此　等　皆　信
 よ　しょう　きよやく　ところ　え　けだしかみ　われら　こと　おい　さら
 に　由　り　て　證　せ　ら　れ　た　れ　ど　も、　許　約　せ　ら　れ　し　所　を　獲　ざ　り　き、　蓋　神　は　我　等　の　事　に　於　て　更　に
 よ　こと　よけん　かれら　われら　とも　まつた　え　ため
 善　き　事　を　預　見　せ　り、　彼　等　は　我　等　と　偕　に　せ　ず　し　て　は　全　き　を　得　ざ　ら　ん　爲　な　り。

(比較用　口語訳) 兄弟たちよ、信仰によって、他国にいるようにして約束の地に宿り、同じ約束を継ぐイサク、ヤコブと共に、幕屋に住んだ。彼は、ゆるがぬ土台の上に建てられた都を、待ち望んでいたのである。その都をもくろみ、また建てたのは、神である。信仰によって、アブラハムは、試練を受けたとき、イサクをささげた。すなわち、約束を受けていた彼が、そのひとり子をささげたのである。この子については、「イサクから出る者が、あなたの子孫と呼ばれるであろう」と言われていたのであった。彼は、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである。信仰によって、イサクは、きたるべきことについて、ヤコブとエサウとを祝福した。信仰によって、ヤコブは死のまぎわに、ヨセフの子らをひとりひとり祝福し、そしてそのつえのかしらによりかかって礼拝した。信仰によって、ヨセフはその臨終に、イスラエルの子らの出て行くことを思い、自分の骨のことについてさしずした。信仰によって、モーセの生れたとき、両親は、三か月のあいだ彼を隠した。それは、彼らが子供のうるわしいのを見たからである。彼らはまた、王の命令をも恐れなかった。このほか、何を言おうか。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行い、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なおほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つるぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、この世は彼らの住む所ではなかった)、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよひ続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。

【 アリルイヤ 聖世祖の主日 第4調 】

司祭) なんぢ　へいあん
 爾　に　平　安、

誦經) なんぢ　しん
 爾　の　神　に　も、

司祭) えいち
 睿　智、

誦經) アリルイヤ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ われら おのれ みみ き わ れつそ なんぢ おこな こと われら の} 神よ、我等は己の耳にて聞けり、我が列祖は爾が行いし事を我等に述べたり、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。（

誦經) ^{なんぢ われら わ てき すく われら にく もの はづか} 爾は我等を我が敵より救い、我等を疾む者を辱しめたり、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。（

司祭) (^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 ^{エヴァンゲリオン} 福音經 マトフェイ福音書1端 1章1~25節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ^{でん}傳^{せいふくいんけい}の聖福音^{よみ}經の讀、



司祭) 謹^{つつし}みて聽^きくべし、ダヴィドの子^こ、アヴラアムの子^こ、イイススハリストスの族譜^{ぞくふ}。アヴラアム

はイサク^うを生み、イサクはイアコフ^うを生み、イアコフはイウダ^{およ}及び其^{そのけいてい}兄弟^うを生み、イウダはファミリ^よに因^{およ}りてファレス^う及びザラ^うを生み、ファレスはエスロム^うを生み、エスロムはアラム^うを生み、アラムはアミナダフ^うを生み、アミナダフはナアツソン^うを生み、ナアツソンはサルモン^うを生み、サルモンはラハヴ^よに因^うりてヴオオズ^うを生み、ヴオオズはルフイ^よに因^うりてオヴィド^うを生み、オヴィドはイエッセイ^うを生み、イエッセイはダヴィド^{おう}王^うを生み、ダヴィド^{おう}王^うはウリヤ^{つま}の妻^よに因^うりてソロモン^うを生み、ソロモンはロヴァアム^うを生み、ロヴァアムはアヴィヤ^うを生み、アヴィヤはアサ^うを生み、アサはイオサファト^うを生み、イオサファトはイオラム^うを生み、イオラムはオ ज्या^うを生み、オ ज्याはイオアフアム^うを生み、イオアフアムはアハズ^うを生み、アハズはエゼキヤ^うを生み、エゼキヤはマナッシヤ^うを生み、マナッシヤはアモン^うを生み、アモンはイオシヤ^うを生み、イオシヤはイオアキム^うを生み、イオアキムは、ヴァヴィロン^{うつ}に徙^{まえ}さるる前^う、イエホニヤ^{およ}及び其^{そのけいてい}兄弟^うを生み、ヴァヴィロン^{うつ}に徙されし^{のち}後^う、イエホニヤはサラフィイリ^うを生み、サラフィイリはゾロヴァヴェリ^うを生み、ゾロヴァヴェリはアヴィウド^うを生み、アヴィウドはエリアキム^うを生み、エリアキムはアゾル^うを生み、アゾルはサドク^うを生み、サドクはアヒム^うを生み、アヒムはエリウド^うを生み、エリウドはエレアザル^うを生み、エレアザルはマトファン^うを生み、マトファンはイアコフ^うを生み、イアコフはイオシフ^うを生めり、
即^{すなわち} マリヤ^{おっと}の夫^{とな}なり、マリヤよりハリストスと稱^{うま}うるイイススは生^かれたり。是^{ごと}くの如^よく世^うを

歴ること、アブラムよりダヴィドに至るまで 十 四代、ダヴィドよりヴァヴィロンに徙さる
 るに至るまで亦 十 四代、ヴァヴィロンに徙されしよりハリストスに至るまで又 十 四代
 なり。イイススハリストスの生まること左の如し、其 母 マリヤ、イオシフに聘せられて、未
 だ婚せざる先に、聖 神 に由りて孕めること 見 れたり。その 夫 イオシフは義人にして、之
 を 顯 にせんことを欲せず、私 に彼を離さんことを望めり。然れども此の事を思える時、
 視よ、主の 使 夢に彼に現れて曰えり、ダヴィドの子イオシフよ、爾 の妻 マリヤを納る
 ことを懼るる勿れ、蓋 其 内に孕まれし者は聖 神 に由るなり、彼は子を生まん、爾 其
 名をイイススと名づけん、彼 其 民を其 罪より救わんとすればなり。凡 此の事の成りしは、
 主が預言者を以て言いし 所 に應うを致す、曰く、視よ、童 女 孕みて子を生まん、其名は
 エムヌイルと稱えられん、譯すれば神 我等と偕にするなり。イオシフ 寐 より起きて、主の
 使 の彼に命ぜし如く 行い、其 妻を納れたり。惟 未だ室を同じくせざるに、其 冢子
 を生むに 迨べり、 則 其名をイイススと名づけたり。

(比較用 口語訳) アブラハムの子であるダビデの子、イエス・キリストの系図。アブラハムはイサクの父であり、イサクはヤコブの父、ヤコブはユダとその兄弟たちとの父、ユダはタマルによるパレスとザラとの父、パレスはエスロンの父、エスロンはアラムの父、アラムはアミナダブの父、アミナダブはナアソンの父、ナアソンはサルモンの父、サルモンはラハブによるボアズの父、ボアズはルツによるオベデの父、オベデはエッサイの父、エッサイはダビデ王の父であった。ダビデはウリヤの妻によるソロモンの父であり、ソロモンはレハベアムの父、レハベアムはアビヤの父、アビヤはアサの父、アサはヨサパテの父、ヨサパテはヨラムの父、ヨラムはウジヤの父、ウジヤはヨタムの父、ヨタムはアハズの父、アハズはヒゼキヤの父、ヒゼキヤはマナセの父、マナセはアモンの父、アモンはヨシヤの父、ヨシヤはバビロンへ移されたころ、エコニヤとその兄弟たちとの父となった。バビロンへ移されたのち、エコニヤはサラテルの父となった。サラテルはゾロバベルの父、ゾロバベルはアビウデの父、アビウデはエリヤキムの父、エリヤキムはアゾルの父、アゾルはサドクの父、サドクはアキムの父、アキムはエリウデの父、エリウデはエレアザルの父、エレアザルはマトンの父、マトンはヤコブの父、ヤコブはマリヤの夫ヨセフの父であった。このマリヤからキリストといわれるイエスがお生れになった。だから、アブラハムからダビデまでの代は合わせて十四代、ダビデからバビロンへ移されるまでは十四代、そして、バビロンへ移されてからキリストまでは十四代である。イエス・キリストの誕生の次第はこうであった。母マリヤはヨセフと婚約していたが、まだ一緒にならない前に、聖霊によって身重になった。夫ヨセフは正しい人であったので、彼女のことが公けになることを好まず、ひそかに離縁しようとした。彼がこのことを思いめぐらしていたとき、主の使が夢に現れて言った、「ダビデの子ヨセフよ、心配しないでマリヤを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである。彼女は男の子を産むであろう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである」。すべてこれらのことが起ったのは、主が預言者によって言われたことの成就するためである。すなわち、「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであろう。その名はインマヌエルと呼ばれる

であろう」。これは、「神われらと共にいます」という意味である。ヨセフは眠りからさめた後に、主の使が命じたとおりに、マリヤを妻に迎えた。しかし、子が生れるまでは、彼女を知ることはなかった。そして、その子をイエスと名づけた。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ